

新性役割尺度の構成に関する研究

井上知子・三川俊樹・芳田茂樹*

A Study of the Construction of a New Gender-Role Scale

Tomoko INOUE, Toshiki MIKAWA and Shigeki YOSHIDA*

I. 問題提起

青年期における人格形成および精神的健康に関する我々の一連の研究（井上他 1989, 1990; 三川他 1989, 1990, 1991）のために1989年に作成した性役割尺度を使用して、自我同一性地位、職業価値観、役割受容等との関連から、青年期の人格形成についての検討を行ってきた。その結果についての討議のために、1990年に改ためて性役割に関する最新の文献による検討を行ない、さらに2年間集積した資料をもとに性役割尺度の妥当性を中心にした尺度としての有効性についての検討をおこなった。その結果、性役割同一性についての新しい概念的モデルが提案され、それに基づいた研究が行われはじめており、今までの両性性的性役割の概念導入による測定的な方法から、個人の性役割概念についての多面的なモデル（the multiplicity model of gender identity）による多方向的な研究へと発展していることが示唆された。また、我々が作成使用してきた尺度について、因子分析的検討をおこない、他の同様の研究での問題点の指摘との関連から考察した結果、いくつかの改定すべき問題点があることが明らかになった。

まず、第1の問題点は、項目源として参考にした Bem の尺度は自己評価による反応を基に作成されたものであり、もう一つの Spence の尺度はアメリカ社会でのステレオティピカルな性役割についての反応の結果であったため、反応基準の異なる尺度を一緒に取り扱うことが適切であったか否かの検討をする必要があることであった。第2の問題点は、尺度作成のために性役割予備尺度として、各30項目の男性性項目と女性性項目を選定して因子分析をおこない、男性性項目、女性性項目ともに2因子（統合性、典型性）を抽出しえた。その後、この尺度による資料の収集を行い、4因子の関連について分析した結果、必ずしもそれぞれ2因子が抽出

* 大手前女子短期大学講師、本学心理学科非常勤講師

しえず、また、どの因子にも負荷せず、因子の妥当性の観点からみると不適切な項目が数個含まれていることが判明した。さらに、この尺度には「男性的である」という項目は含まれているのにたいして、それと対をなすといえる「女性的である」は含まれていないが、Ashmore (1990) の指摘にもみられたように「男性的である」と「女性的である」という項目は他の性役割項目とは別に考えることが望ましいものといえ、この点も改めて考慮すべきであることが判明した。

これらの問題点を改善した新たな性役割尺度を作成するために、井上 (1976:1987) は「性役割の概念と測定について」すでに文献による展望をおこなったが、今までに日本で作成され公表されているいくつかの研究において使用された尺度項目について、再度、具体的に検討をし、われわれの尺度開発への参考としよう。

柏木 (1967:1972:1974) は、「青年期における性役割の認知」について研究をおこなうために、成人および青年を対象に“望ましい男性”“望ましい女性”についての自由記述を予備的に調査し、その資料に基づいて男性・女性の役割を記述するのにふさわしい特性を示す形容詞を34個選出した。これら34の形容詞から性差の認められた29項目について因子分析をおこない、3因子を抽出している。第1因子は、『知性の因子』で、頭がよい、学歴がある、理性的、政治に関心がある、線の太い、かわいい (逆転項目)、指導力のある、気持ちのこまやかな (逆転項目)、背が高い、謙遜な (逆転項目)、仕事に専心的、の11項目に負荷が高く、第2因子は、『従順と美の因子』で、従順な、謙遜な、男性に依存的、容貌の美しい、かわいい、気持ちのこまやかな、仕事に専心的 (逆転項目)、積極的の8項目に高い負荷を示し、第3因子は、『経済力、行動的実力』の因子と命名され、経済力のある、意志強固な、活発な、積極的、仕事に専心的、視野の広い、自信のある、忍耐強い (逆転項目) の8項目からなる因子である。さらに第1、3因子は男性役割に関する因子であり、高く男性に期待される内容であるの対して、第2因子は女性因子で女性に高く期待される因子であると解釈をしている。1960年代当時においては男性役割に比較して、女性役割は未分化で曖昧な概念化しかされていず、1960年代の性役割ステレオタイプの反映といえる。伊藤 (1978:1985:1986) は「性役割の評価に関する研究」として、個人・社会・男性・女性の性役割に対する評価の差異について検討を行った。その研究の中で、種々の生活背景を持つ男性84名、女性127名に男性役割、女性役割についての反応語を求め、男性役割55語、女性役割55語のチェックリストを作成した。これらのリストについて「一般に男性(女性)にとってどの程度重要だと思いますか」という指示により、男性40名、女性40名に7段階評定法による反応を求め、その反応について因子分析した。その結果、M-H-F scaleと彼女自身が名づけた尺度が作成された。この尺度はMasculinityとFemininity, Humanityの3因子から構成されており、Masculinityには、冒険心に富んだ、たくましい、大胆な、指導力のある、信念をもった、頼りがいのある、行動力のある、自

己主張のできる、意志の強い、決断力のあるの10項目が充当し、Femininityは、かわいい、優雅な、色気のある、献身的な、愛嬌のある、言葉使いのていねいな、繊細な、従順な、静かな、おしゃれなの10項目で構成され、Humanityは、忍耐強い、心の広い、頭に良い、明るい、暖かい、誠実な、健康な、率直な、自分の生き方のある、視野の広いの10項目であった。この尺度を使用して当初の研究目的について検討した結果、男性役割期待は社会的望ましさと一致するが、女性についてはあてはまらないこと、男性においても女性においてもHumanityという要素が多く望まれていることなどの考察がなされている。さらに、その後の性役割に関する考え方に両性性の概念が導入されたことから、因子分析により双極尺度による男性役割期待、女性役割期待、個人的評価の尺度を作成し、その信頼性、妥当性についての検討を行った(1986)。付表1に示すように、この尺度では前の尺度項目との因子の変動が見られる。山口(1985:1989)は、男性性・女性性の2側面について検討を行なうため、女性性尺度(Femininity)として、Fm(Femininity-mother)とFw(Femininity-woman)、男性性尺度(Masculinity)として、Mf(Masculinity-father)、Mm(Masculinity-man)およびA(Adult)の5尺度からなる質問紙を作成した。Fmには、子供を育てる、つつみこむような、いつくしみ深い、自己犠牲的な、かいがいい、子供を産んだことのある、ふくやかな、献身的な、あたたかいの9項目が、Fwには、かわいい、色気のある、しなやかな、曲線的な、おしゃれな、細やかな、声が高い、従順な、情熱的な9項目がはいっている。また、Mfには、威厳のある、家族を養う、厳しい、権威的である、子供に意見する、子供の独立を喜ぶ、家族の生活を守る、指導力のある、家計を支えるの9項目が、Mmには、冒険心にとんだ、勇敢な、エネルギーギッシュな、たくましい、論理的な、闘争的な、筋肉質な、ほねばった、行動力のあるの9項目がはいっている。日本における性役割尺度はまだいくつかみられるが、多くの尺度に共通に認められる傾向として、男性性役割と女性性役割としてあげられている項目の内容次元が斉一でないこと、すなわち女性役割には外見的な身体的特徴が項目としてあげられている尺度が多いが、これらが性役割といえるか否かは議論の余地のあるところである。さらに多くの尺度項目は社会から期待される性役割観という観点から項目を選定しているが、必ずしも社会的期待にそってそれぞれの個人の獲得する性役割同一性が形成されるとは言えないことも問題点として指摘しうる。

Lenney(1991)は、現在代表的とみなされている男性性、女性性、両性性を測定する尺度について、その概念的および操作的定義、性役割研究の歴史的展望をおこない、①性役割尺度には、一次元的、二次元的および他次元的観点があること、さらに両性性の性役割を理想とみなす見方があること、②性役割尺度の項目源のいくつかは現在でも男性性および女性性に基づく概念としてふさわしいかどうかの検討が必要であること、③性役割とセルフ・エスティームおよび心理学的な健康性との関連についての検討が多くなされており、男性性が女性

性、両性性に比べて、より健康性との関連が密接であると結論づけられている。Lenney は、この展望に続いて、BSRI (Bem, 1974), PAQ (Spence et al., 1975), PRF ANDRO (Berzins, Welling & Wetter, 1978), ACL (Heilbrun, 1976), MF scales from the CPI (Baucom, 1976), SRBS (Orlofsky, 1981) について、一つづつ尺度化の過程、信頼性、妥当性、について検討を行い、尺度に対するコメントを各尺度の検討の最後に結論的に付けている。このようにして検討した結果、最後にこれからの研究への指針として、このまま、根本となる性役割についての概念定義を明確にしないまま研究を続行するのはますます不一致や混乱を引き起こすことになるであろうこと、現在までの性役割研究の対象が青年期に集中していたために定義の曖昧さがそのままで残されていたが、今後、定義を明確に確立し、多様な対象についての測定をすることのできる尺度の開発の必要性があること、などが示唆されている。

本研究は、上述のいろいろな観点からの問題提起を考慮しながら、現在の日本における性役割を測定するために適切なスケールを再度作成することを目的としてなされた。

II. 新性役割尺度の作成

1. 性役割予備尺度構成の方法

1989年に作成した尺度項目の再検討のために、あらたに、今まで内外で発表されてきた性役割尺度の項目を参考にして、項目の選定を行った。選定の基準としては、男性及び女性の人格特性、一般的な社会的態度、興味、関心を示すと考えられている項目内容のみに限定し、身体的特徴に関する内容は省いた。その結果、100項目からなる性役割予備尺度を作成した。この尺度について、主に大阪を中心とした関西在住の国公私立の4年制の大学に在籍中の学生を対象として、「自分自身についてどのように考えていますか」という設問で5段階自己評定を行わせた。調査は集団一斉法で行い、質問用紙回収後、記入もれ等不備なデータは除外し、分析に使用した有効データ数は、男子449名、女子498名、計947名であった。調査は1991年に行った。調査票のフェイス・シートには、性別の他に学年、年齢の記入を求めたが、本研究はその目的から鑑みて性別以外の条件は分析には用いていない。

表1は、100項目それぞれについての男女別の平均値、SD および男子に対する女子の平均値の差に基づくt値と、t値によるランクが示されている。それ故、ランクは、順に男子の平均値が女子よりも高いものから、女子の方が男子よりも高いものへという方向性で付されている。このランクを基に、1から33までの項目を男性性予備項目、68から100までの項目を女性性予備項目として抽出した。男性性予備項目は男子の方が女子よりも自分に当てはまると評定した項目であり、女性性予備項目は女子の方が男子よりも自分に当てはまるとみなした項目である。この結果を示したのが表2である。

表 2. 新性役割予備尺度項目

N o 男性性項目	N o 女性性項目
1. スポーツが好きである	2. 陽気である
5. 思いやりがある	4. 積極的である
8. やさしい	9. 人に信用されやすい
10. 独立心が強い	11. 女らしい
15. 数学や科学が好きである	12. 空想的である
20. おとなしい	16. 物事を前向きに考える
21. 家庭的である	17. こどもっぽいところがある
22. 男らしい	18. 生活に変化を求める
24. 短気である	19. 負けず嫌いだ
25. 自分に自信がある	23. 心の傷ついた人をなぐさめる
26. やさしい声で話す	27. 協調性がある
28. 物事を論理的に考える	30. 傷つきやすい
29. 親切である	31. 社交的である
32. 創造的である	33. 安心を求める
37. 仕事の手腕がある	34. 態度がはっきりしている
38. 機転がきく	36. 嫉妬深い
41. 気持ちを顔にあらわしやすい	45. 声大きい
43. 冒険心が強い	48. 多くの人に認められたい
49. 性的な関心が強い	51. 幸せを感じる
50. ものわかりが良い	60. 友達づきあいがよい
53. 良心的である	61. 物事に動じない
54. 物事に注意深い	63. 習慣やしきたりを重んじる
59. 人に気配りができる	64. 意欲的である
71. 内気である	70. 自分の信念を曲げない
72. うぬぼれやすい	76. 行動的である
73. 強引である	77. 人をほめるのが好きである
75. 信心深い	78. すぐに泣く
81. 物事に批判的である	79. 自分の意見を主張する
85. 支配的である	80. 感情的である
88. 優越感がある	82. ねばり強い
92. 言葉使いが丁寧である	83. 絵や音楽が好きである
94. 世間をよく知っている	87. 流行に敏感である
97. 知的である	93. 物事をテキパキと片づける

表 2 に示された男性項目および女性項目から、柏木、伊藤、山口らの研究であげられている男性性項目、女性性項目とは明らかな違いを見いださう。さらに、柏木その他の研究がかつての日本社会でいわれてきた通念的な男らしさ、女らしさと一致した内容であったことを考えると、いままでの性役割ステレオタイプとも大きくズレていることが明確に示されている。現代は、政治的状況においても、意識的状況においても、ただ単に 20 世紀末であるというだけにはとどまらない世界的規模での大変革が生じている時期であり、青年の自己意識にもいままでの観念では見られなかったような変化が生じてきているのではないと思われる。しかし、ある領域の哲学者や社会学者が主張するようなボーダーレスの時代とか、規範無き時代という言葉では言い表していないような状況を呈しているものといえよう。すなわち、この変化にはいままでの男性らしさと女性らしさの境界の変化を見てとることができ、男性・女性の特性

新性役割尺度の構成に関する研究

のある種のねじれ現象とみなすことができる。

2. 新性役割尺度の作成

性役割前予備尺度から抽出した男性性予備尺度 33 項目、および女性性予備尺度 33 項目について男性性項目は男子大学生の評定結果に基づいて、女性性項目は女子学生の評定結果に基づいて、項目間のピアソンの相関係数を算出し、主因子法による因子分析を行い、ヴァリマックス回転した結果が、表 3 である。この表に示されているように、男女ともに、3 因子が抽出さ

表 3. 性役割予備尺度の因子分析結果 (3 因子) (主因子法・Varimax 回転)

100項目 男性性項目					100項目 女性性項目						
No	No	F1	F2	F3	h ²	No	No	F1	F2	F3	h ²
13.	29.	.7908	.0064	-.0073	.6254	25.	76.	.7814	.2187	-.0510	.6610
2.	5.	.7872	-.0593	-.0172	.6236	2.	4.	.7314	.2003	.0128	.5752
3.	8.	.7779	-.0314	-.0310	.6071	28.	79.	.6983	-.0167	.1861	.5225
21.	53.	.7344	-.0792	.1277	.5620	23.	64.	.6224	.3593	-.0756	.5222
23.	59.	.6266	-.0876	.1594	.4259	1.	2.	.5986	.3285	.0401	.4682
20.	50.	.4771	-.0106	.3533	.3525	15.	34.	.5946	.1024	.0609	.3680
11.	26.	.4667	.2505	.2205	.3292	13.	31.	.5855	.4600	.0585	.5578
7.	21.	.3577	.1179	.2104	.1861	17.	45.	.5303	.0047	.2468	.3422
31.	92.	.3381	.0766	.2495	.1824	33.	93.	.5211	.2827	-.1897	.3875
26.	73.	.0037	-.7557	.0672	.5766	24.	70.	.5109	-.0166	-.1482	.2833
6.	20.	.1016	.6300	.0418	.4090	8.	18.	.4932	.0509	.1562	.2702
29.	85.	-.1154	-.6087	.2399	.4414	6.	16.	.4923	.2555	-.2845	.3886
24.	71.	.0023	.5539	-.0076	.3068	21.	61.	.4784	.1353	-.4316	.4335
4.	10.	.0952	-.5154	.2764	.3511	9.	19.	.4206	.0171	.2103	.2214
18.	43.	.2442	-.4983	.2382	.3647	11.	27.	.0362	.6912	-.0866	.4865
10.	25.	.1727	-.4932	.4044	.4366	4.	11.	-.0355	.5942	.0339	.3555
9.	24.	-.1596	-.4381	-.1678	.2456	3.	9.	.2068	.5739	-.0966	.3815
8.	22.	.3721	-.4310	.2452	.3843	20.	60.	.4315	.5714	.0163	.5129
19.	49.	.1843	-.4130	-.0294	.2054	10.	23.	.1903	.5639	.1540	.3779
1.	1.	.3618	-.3729	-.0404	.2715	19.	51.	.2285	.5029	.0125	.3052
25.	72.	-.1125	-.3694	.1860	.1837	26.	77.	.1498	.4165	.1565	.2204
17.	41.	.0573	-.3453	-.1692	.1511	22.	63.	-.0214	.3877	.1205	.1653
12.	28.	.0596	.1312	.7065	.5199	32.	87.	.2179	.3035	.0948	.1486
33.	97.	.2681	-.1513	.6063	.4623	29.	80.	.2946	-.0531	.6557	.5196
15.	37.	.3596	-.3121	.5063	.4830	12.	30.	-.1378	.2417	.6034	.4415
16.	38.	.3247	-.2988	.5023	.4470	16.	36.	-.1059	.0953	.5876	.3656
5.	15.	-.0558	.0427	.4756	.2311	14.	33.	-.1355	.3480	.5522	.4444
32.	94.	.3192	-.3072	.4306	.3816	27.	78.	-.0227	.0971	.5186	.2789
14.	32.	.2525	-.2729	.4282	.3216	5.	12.	.0798	-.1208	.4589	.2315
22.	54.	.2761	.1454	.4210	.2747	18.	48.	.3362	.2010	.4546	.3601
30.	88.	.1029	-.4064	.4177	.3502	7.	17.	.1928	-.1249	.4316	.2391
28.	81.	-.2431	-.2287	.3791	.2551	30.	82.	.2494	.2314	-.1422	.1365
27.	75.	.2940	-.1199	.0365	.1022	31.	83.	.1620	.1558	.1423	.0708
%		14.09	12.41	10.01	36.51			16.82	10.72	8.95	36.49

れた。

男性性の第1因子は「13. 親切である」「2. 思いやりがある」「3. やさしい」「21. 良心的である」「23. 人に気配りができる」「11. やさしい声で話す」という項目に高い負荷が見られる。そこで、『統合的男性性』と命名しよう。この因子は、1989年版の性役割尺度の第1因子である男性統合性に対応するものである。男性性第2因子は「26. 強引である」「29. 支配的である」「4. 独立心がつよい」「18. 冒険心がつよい」「9. 短気である」「8. 男らしい」の項目に高い負荷が見られる。これらの項目はかつて日本で作成された男性性項目であり、柏木の第3因子である『経済力・行動的実力』の因子、あるいは伊藤のM尺度とほぼ同じ項目内容であり、『行動的男性性』と命名することができ、伝統的な男性役割であるとみなすことができる。男性性第3因子は「12. 物事を論理的に考える」「33. 知的である」「15. 仕事の手腕がある」「16. 機転がきく」「5. 数学や科学が好きである」「14. 創造的である」の項目に高い負荷を示している。この結果から、『態度・関心的男性性』ということができ、この第3因子は柏木の第1因子である『知性の因子』に対応するものである。(なお、ここであげた項目番号は、33項目の予備尺度の番号である。)

表3の男性性尺度の第1因子の項目20、第2因子の10、第3因子の32については、二つ以上の因子へほぼ同じ負荷を示しているために、因子項目から省いて解釈を行い、新尺度項目としての採用もしなかった。また男性性第2因子の項目6と24は逆転項目であるため、新尺度項目としては採択しなかった。

次に、女性性項目の結果について検討しよう。女性性の第1因子は「25. 行動的である」「2. 積極的である」「28. 自分の意見を主張する」「23. 意欲的である」「1. 陽気である」「15. 態度がはっきりしている」という項目に高い負荷を示しており、『統合的女性性』と命名することができ、この第1因子は、1989年度版の性役割尺度の女性統合性に対応するものである。女性性の第2因子は「11. 協調性がある」「4. 女らしい」「3. 人に信用されやすい」「10. 心の傷ついた人をなぐさめる」「19. 幸せを感じる」「26. 人をほめるのが好きである」の項目に高い負荷がみられた。これらの項目内容は、女性の行動的側面に関係しており、『行動的女性性』と命名しえるが、過去の研究では、対応する尺度は見いだせない。女性性の第3因子は「29. 感情的である」「12. 傷つきやすい」「16. 嫉妬深い」「14. 安心を求める」「27. すぐ泣く」「5. 空想的である」という項目に負荷が高く、『態度・関心的女性性』と命名でき、柏木の第2因子である『従順と美の因子』とかなり重なりが見られる伝統的な女性性の因子であるということが出来る。なお、第2因子の中の項目20は逆転項目であるため、第2因子の項目としては採択しなかった。

以上の因子分析の結果に基づいて、男性性尺度、女性性尺度ともに、3因子各6項目、合計それぞれ18項目からなる性役割尺度を、新たな尺度として作成しえた。

3. 新性役割尺度の検討

(1) 新性役割尺度の項目分析

新性役割尺度である男性尺度項目 18 項目と女性尺度項目 18 項目について、その尺度としての有効性を検討するために項目分析をおこなった。表 4 は、新性役割尺度の項目別の平均値と SD および各因子ごとの内的一貫性についての分析結果を示したものである。平均値と SD は、性役割前予備尺度である 100 項目ですでに示したものと重複しているので (表 1)、ここでは改めて検討する必要はないものと思われる。内的一貫性については、男性性尺度では、 α 係数が第 1 因子で 0.83、第 2 因子、第 3 因子とともに 0.70 であり、保証されているものといえよう。女性性尺度においては、第 1 因子では $\alpha = 0.83$ と高いが、第 2 因子で 0.67、第 3 因子で 0.64 と他の 4 つの尺度よりは低いことが判明した。しかし項目数が、それぞれ 6 項目であることから考えると、この数値でもある程度の内的一貫性は保証されていると見なしうるものと考えられる。

そこで、尺度の因子的妥当性を検討するために、男女それぞれの被験者について、18 の新性役割尺度項目に関する項目間の相関をピアソンの相関係数により算出し、主因子法による因

表 4. 新性役割尺度項目別平均値 / SD および内的一貫性

男性性項目 (N=449)				女性性項目 (N=498)			
No	No (33 項目)	Mean	SD	No	No (33 項目)	Mean	SD
第 1 因子 ($\alpha = .83$)				第 1 因子 ($\alpha = .83$)			
1	13 (29)	3.53	0.91	1	25 (76)	3.04	0.98
4	2 (5)	3.59	0.95	4	2 (4)	3.10	0.96
7	3 (8)	3.67	0.96	7	28 (79)	3.21	0.96
10	21 (53)	3.48	0.91	10	23 (64)	3.17	0.89
13	23 (59)	3.43	0.93	13	1 (2)	3.59	0.92
16	11 (26)	2.82	1.00	16	15 (34)	3.29	1.10
第 2 因子 ($\alpha = .70$)				第 2 因子 ($\alpha = .67$)			
2	26 (73)	2.96	1.10	2	11 (27)	3.23	0.99
5	29 (85)	2.85	1.09	5	4 (11)	2.60	0.93
8	4 (10)	3.36	1.15	8	3 (9)	3.29	0.84
11	18 (43)	3.43	1.07	11	10 (23)	3.31	0.91
14	9 (24)	3.33	1.20	14	19 (51)	3.39	1.00
17	8 (22)	3.21	0.84	17	26 (77)	3.05	1.05
第 3 因子 ($\alpha = .70$)				第 3 因子 ($\alpha = .64$)			
3	12 (28)	3.10	1.12	3	29 (80)	3.50	1.11
6	33 (97)	3.00	1.02	6	12 (30)	3.68	0.98
9	15 (37)	2.90	0.98	9	16 (36)	3.33	1.08
12	16 (38)	3.11	1.03	12	14 (33)	4.04	0.86
15	5 (15)	2.47	1.36	15	27 (78)	2.93	1.28
18	14 (32)	3.28	1.05	18	5 (12)	3.57	1.08

() 内の数字は 100 項目予備尺度での対応番号

表5. 新性役割尺度項目因子分析結果（主因子法・Varimax 回転）

No	男性性項目				女性性項目			
	F1	F2	F3	h ²	F1	F2	F3	h ²
1	.8222	.0282	-.0356	.6781	.8330	-.0834	-.1791	.7330
2	.0118	.8231	.0086	.6777	.0391	-.0940	-.7118	.5170
3	.0322	-.0628	-.7290	.5364	.3698	.6450	.1151	.5661
4	.8216	.0934	.0002	.6838	.8010	-.0361	-.1766	.6741
5	-.1025	.6914	-.1220	.5035	-.0142	.1125	-.5823	.3519
6	.2491	.1812	-.6025	.4578	-.0978	.6761	-.2123	.5117
7	.8255	.0226	-.0332	.6830	.7168	.1474	-.0019	.5355
8	.0819	.5862	-.1993	.3900	.2180	-.0454	-.6160	.4290
9	.2943	.3347	-.5629	.5155	-.1102	.6107	-.0711	.3901
10	.7400	.0567	-.1910	.5873	.6456	-.0963	-.3284	.5339
11	.2127	.5202	-.2672	.3872	.1831	.1769	-.6183	.4472
12	.2469	.3554	-.5317	.4699	-.0961	.5804	-.3169	.4464
13	.6366	.1134	-.1573	.4428	.6528	-.0419	-.2687	.5001
14	-.1445	.5592	.3213	.4368	.2345	-.0177	-.5369	.3436
15	-.0933	-.0081	-.5524	.3139	.0651	.5553	-.0398	.3142
16	.4464	-.2442	-.2738	.3339	.6227	.0856	-.0552	.3981
17	.3277	.4545	-.2662	.3849	.1843	.1620	-.4376	.2517
18	.2254	.3353	-.4479	.3639	.0616	.4995	.1514	.2762
%	20.25	15.35	13.55	49.15	19.04	12.61	14.01	45.66

因子分析を行いヴァリマックス回転した結果が表5に示されている。この結果、新性役割尺度の男性性項目の第1因子は、『統合的男性性』の因子として採択した6項目に高く負荷しており、第2因子は、『行動的男性性』の因子項目である6つに高く負荷しており、第3因子は、『態度・関心的男性性』の6因子項目に高く負荷していることが明らかになった。また、女性性項目においては、新性役割尺度の第1因子は、『統合的女性性』と命名した因子の6項目に負荷が高く、第2因子は、『態度・関心的女性性』を構成する6因子項目に高い負荷を示し、第3因子は、『行動的女性性』の因子項目に高い負荷を示していることが明らかになった。これらの結果から、明らかなように、男性性項目、女性性項目ともに3因子は独立しており、項目の因子間の重複も脱落もまったく見られなかった。これらの事実から、新性役割尺度の因子の妥当性は高いものといえることができる。

（2）新性役割尺度の下位尺度についての検討

次に、各因子尺度について、その有効性を検討してみよう。

表6は、男女それぞれについて下位尺度ごとの平均とSD、及び性差について検討した結果である。この表に示されているように、男子学生においては、新性役割尺度の男性性3因子の平均は、女子学生の平均より統計的に有意に高い値であり、逆に女性性3尺度の内、第2因子、第3因子は女子学生の方が男子学生より有意に高い値であった。女性性の第1尺度については、

新性役割尺度の構成に関する研究

男女間で統計的には有意差は示されなかったが、数値的には女子の方が高い傾向は認められた。この結果から、新性役割尺度の下位尺度として設定された男性性3因子および女性性3因子は、男性、女性それぞれの性役割特性を測定しているものといえる。

表7は、さらに男子学生、女子学生別に6因子間の相関について検討するために、ピアソンの相関係数を算出した結果である。表7-1の男子学生においては、男性性尺度の第1因子と第2因子、男性性の第3因子と女性性の第3因子間および女性性の第1因子と第3因子との相関には有意性は見られなかったが、その他の12の下位尺度間の組み合わせすべてに、1%水準での有意な相関があることが明らかになった。表7-2の女子学生においては、男性性第1因子と男性性第2因子、男性性第2因子と女性性第2因子、男性性第3因子と女性性第3因子および女性性第1因子と第3因子の間には有意な相関はみられなかったが、その他の11の因

表6. 新性役割尺度・尺度平均値／SDおよび性差

尺度名	男子大学生 (N=449)			女子大学生 (N=498)	
	Mean	SD		Mean	SD
男性性第1因子 (Ma1)	20.52	4.15	≫	18.64	3.94
男性性第2因子 (Ma2)	19.15	4.06	≫	17.10	3.57
男性性第3因子 (Ma3)	17.86	4.16	≫	16.64	3.66
女性性第1因子 (Fe1)	18.94	4.63		19.40	4.28
女性性第2因子 (Fe2)	17.53	3.42	≪	18.86	3.54
女性性第3因子 (Fe3)	20.08	3.82	≪	21.05	3.86

>: $p < .05$ ≫: $p < .01$

表7. 新性役割尺度・尺度間相関

表7-1 男子学生結果

	Ma1	Ma2	Ma3	Fe1	Fe2	Fe3
Ma1						
Ma2	.13					
Ma3	.37**	.36**				
Fe1	.31**	.65**	.48**			
Fe2	.66**	.21**	.41**	.44**		
Fe3	.19**	.26**	.12	.10	.28**	

*: $p < .05$ **: $p < .01$

表7-2 女子学生結果

	Ma1	Ma2	Ma3	Fe1	Fe2	Fe3
Ma1						
Ma2	.04					
Ma3	.41**	.34**				
Fe1	.33**	.55**	.54**			
Fe2	.68**	.06	.41**	.40**		
Fe3	.14*	.20**	.01	.08	.16*	

*: $p < .05$ **: $p < .01$

表 8. 新性役割尺度・尺度間因子分析結果（主因子法・Varimax 回転）

	男子大学生				女子大学生			
	F1	F2	F3	h ²	F1	F2	F3	h ²
Ma1	.0777	.8959	.0665	.8131	.8921	.0863	.0599	.8069
Ma2	.8866	-.0518	.2600	.8563	-.1403	.8768	.2297	.8413
Ma3	.5795	.4768	-.1037	.5739	.4943	.6204	-.1982	.6684
Fe1	.8554	.2820	-.0267	.8120	.3284	.8160	-.0337	.7747
Fe2	.2196	.8487	.1774	.7999	.8847	.1342	.0897	.8087
Fe3	.0828	.1540	.9661	.9639	.1214	.0763	.9679	.9576
%	31.91	30.94	17.47	80.32	32.75	30.85	17.36	80.96

子間の組み合わせには有意な相関があることが示された。

表 8 は、表 7 の相関係数に基づいて、因子分析を行った結果である。

男子学生、女子学生ともに 3 因子抽出された。男子学生では、第 1 因子は行動的男性性と統合的女性性に高い負荷を示しており、第 2 因子は統合的男性性と行動的女性性に高い負荷が示され、第 3 因子は態度・関心的女性性に負荷が高いことが示されている。態度・関心的男性性は第 1 因子により高い負荷が示されているが、第 2 因子にもやや負荷が高く示されている。一方、女子学生では、第 1 因子は統合的男性性と行動的女性性に高い負荷をしめし、第 2 因子は行動的男性性、統合的女性性、態度・関心的男性性で構成されており、第 3 因子は態度・関心的女性性のみに高い負荷をしていることがわかった。

これらの結果をまとめると、男子学生における性役割同一性での統合的男性性は、行動的男性性とは関わりがなく、しかも行動的女性性とひとつの因子を構成するものであり、態度・関心的男性性は統合的男性性とも行動的男性性との深く関わって獲得され、行動的男性性および統合的女性性とひとつの因子を構成している。一方女子学生では、性役割における統合的女性性は、男性性および行動的女性性とは大きな相関をしめしており、行動的男性性および態度・関心的男性性とひとつの因子を構成しているが、態度・関心的女性性とは相関がみられなかった。行動的女性性は、行動的男性性以外の因子とは相関があり、統合的男性性とひとつの因子を構成している。態度・関心的女性性は、態度・関心的男性性および統合的女性性とは相関が示されなかったが、行動的女性性、行動的男性性および統合的男性性とは相関が見られたが、因子構造的には独立であった。

以上の結果から、それぞれの下位尺度の意味について考察してみよう。

男性性尺度における『行動的男性性』と『態度・関心的男性性』、および女性性尺度における『行動的女性性』『態度・関心的女性性』は、それぞれ日本における性役割研究の中で伝統的男性役割 (traditional masculine role) と近代的男性役割 (modern masculine role)、および伝統的女性役割 (traditional feminine role) と近代的女性役割 (modern feminine role) として

捉えられてきた特性であり、1989年版の性役割尺度ではこの2側面を男性典型性、女性典型性としてひとつの尺度でとらえていたために前述のような問題点が生じたのではないと思われる。

男性性項目の第1因子である『統合的男性性』は、かつて行動におけるステレオティピカルな男らしさと言われてきた特性とは双極的な性向であり、態度・関心に関する男性性と相関がみられることから、現代の男性の特徴的な傾向を一番如実に物語っているものといえる。現代の男性は、日常生活において男らしさに対するジレンマの中で種々の悩みを持っているといわれている (Komarovsky, M., 1976) 一方で、悩みの見られないあるいは悩みを持たない青年像の増加が報告されている。男らしさに対するジレンマからの脱却への手掛かりは、まさに統合的男性性の獲得にあるものといえよう。

女性性項目における第1因子の『統合的女性性』は、かつて行動における男性的特徴とみなされたものに近い特性で構成されており、男性性の3側面との相関が大きく、しかも『行動的男性性』および『態度・関心的男性性』とひとつの因子をなすものである。

この二つの統合的な因子こそが、現代の性役割の概念に対する問題解決の契機となるものであり、しかも我々の作成した尺度の独自性を示すものである。

Bem, S. (1974) が測定しようとした心理的両性性は、単に男性性と女性性の両方の獲得ということだけでみようとしたために、その後の多くの研究の中で賞賛と同時に批判をあびることとなった。しかも、Bem 自身も BSRI による性役割の測定への疑念から、認知的なアプローチによる研究へとかわっている。もともと、いままでの心理的両性性といわれた概念定義そのものに問題があったために、仮説と相反する結果が示されていたと考えるほうが、より問題の解決が容易になるのではないだろうか。男性には男性としての心理的両性性があり、女性には女性としての心理的両性性があり、その両者には重なる部分はあるとしても同一であることは決してないのは自明のことである。それ故、新性役割尺度で採択したごとく、男性性尺度は男性を対象にして測定する用具として、女性性尺度は女性を対象にして測定する用具として、別個に用意するほうが、同じもので男女両性を測定することにより生じる種々の問題点を解決しえるものであろう。

今後、この尺度について、自我同一性の確立との関係、価値観、その他の生活意識や態度との関係についての分析、検討を集積することにより、尺度の有効性についてさらに実証的検討をしていくことが肝要である。さらに、Lenney の指摘にもあったように、性役割の獲得は、幼児期にはじまるものであり、生涯を通じて形成変容するものである。その事実から考えると、対象を青年期のみではなく児童期から老年期まで拡大する方向と、青年期も大学生だけでなく、種々の生活背景をもつ青年に拡大していく方向の研究をすすめることが次の課題である。

文 献

- Ashmore, R.D. 1990 Sex, Gender, and the Individual. in Pervin, L.A. (ed.) *Handbook of Personality: Theory and Research*. The Guilford Press.
- Bem, S.L. 1974 The Measurement of Psychological Androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 165-172
- 井上知子 1987 性役割の概念と測定について 追手門学院大学 20 周年記念論集—文学部篇, 17-27.
- 井上知子・三川俊樹・芳田茂樹 1989 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究 (I)—研究方法に関する文献展望 追手門学院大学文学部紀要, 23, 1-17.
- 井上知子・三川俊樹・芳田茂樹 1990 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究 (IV)—性役割尺度再考 追手門学院大学文学部紀要, 24, 39-48.
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, 26, 1-11.
- 伊藤裕子 1981 女子青年の性役割意識の構造 教育心理学研究, 29, 84-87.
- 伊藤裕子 1986 性役割特性語の意味構造—性役割測定尺度 (ISRS) 作成の試み 教育心理学研究, 34, 168-174.
- 柏木恵子 1967 青年期における性役割認知 教育心理学研究, 15, 193-202.
- 柏木恵子 1972 青年期における性役割認知 II 教育心理学研究, 20, 48-58.
- 柏木恵子 1974 青年期における性役割認知 (III)—女子学生青年を中心として 教育心理学研究, 22, 205-215.
- Komarovsky, M. 1976 *Dilemmas of Masculinity — A Study of College Youth* W.W. Norton & Company, INC (池上千寿子・福井浅子訳 1984 男らしさのジレンマ—性別役割の変化にとまどう大学生の悩み 家政教育社)
- Lenney, E. 1991 Sex Roles: The Measurement of Masculinity, Femininity, and Androgyny. In Robinson, J.P., Shaver, P.R., & Wrightsman, L.S. (eds.) *Measurement of Personality and Social Psychological Attitudes*, Academic Press.
- 三川俊樹・井上知子・芳田茂樹 1989 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究 (II)—自我同一性地位および性役割の測定 追手門学院大学文学部紀要, 23, 19-36.
- 三川俊樹・井上知子・芳田茂樹 1990 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究 (III)—性役割および自我同一性地位と価値観の関連 追手門学院大学文学部紀要, 24, 23-37.
- 三川俊樹・井上知子・芳田茂樹 1991 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究 (V)—性役割および自我同一性地位, 役割受容と充実感との関連 追手門学院大学文学部紀要, 25, 51-67.
- 山口素子 1985 男性性・女性性の 2 側面についての検討 心理学研究, 56, 215-221.
- 山口素子 1989 男性性・女性性の 2 側面についての検討 II 心理学研究, 69, 350-356.

1993 年 9 月 30 日 受理

新性役割尺度の構成に関する研究

表 1. 性役割予備尺度項目の平均値／SDおよび性差

項 目 番 号	男子 (N=449)		女子 (N=498)		t 値	Rank
	Mean	SD	Mean	SD		
1. スポーツが好きである。	3.85	1.09	3.44	1.13	5.56	7
2. 陽気である。	3.46	0.98	3.59	0.92	- 2.23	93
3. 好奇心がつよい。	3.91	0.95	3.86	0.91	0.82	53
4. 積極的である。	3.01	1.00	3.10	0.96	- 1.44	90
5. 思いやりがある。	3.59	0.95	3.26	0.87	5.66	6
6. 正直である。	3.65	0.99	3.57	0.93	1.21	47
7. 個性がつよい。	3.46	1.10	3.35	1.06	1.56	42
8. やさしい。	3.67	0.96	3.16	0.88	8.61	3
9. 人に信用される。	3.22	0.95	3.29	0.84	- 1.07	85
10. 独立心が強い。	3.36	1.15	3.18	1.17	2.41	29
11. 女らしい。	1.76	0.91	2.60	0.93	-13.98	100
12. 空想的である。	3.49	1.11	3.57	1.08	- 1.12	88
13. 失敗をおそれない。	2.54	1.03	2.52	0.99	0.35	66
14. 感謝の気持ちがつよい。	3.59	0.95	3.47	0.93	2.06	34
15. 数学や科学が好きである。	2.47	1.36	2.26	1.20	2.48	28
16. 物事を前向きに考える。	3.24	1.06	3.24	1.02	- 0.00	72
17. こどもっぽいところがある。	3.76	0.91	3.77	0.93	- 0.19	76
18. 生活に変化を求める。	3.74	1.05	3.72	1.03	0.30	69
19. 負けず嫌いである。	3.69	1.10	3.88	1.03	- 2.73	94
20. おとなしい。	3.09	1.11	2.54	1.03	7.97	4
21. 家庭的である。	3.01	1.02	2.76	1.06	3.62	18
22. 男らしい。	3.21	0.84	2.18	1.00	17.23	2
23. 心の傷ついた人をなぐさめる。	3.29	0.99	3.31	0.91	- 0.25	80
24. 短気である。	3.33	1.20	3.16	1.03	2.36	30
25. 自分に自信がある。	2.78	1.04	2.48	0.95	4.64	12
26. やさしい声で話す。	2.82	1.00	2.53	0.93	4.50	14
27. 協調性がある。	3.16	1.00	3.23	0.99	- 1.12	87
28. 物事を論理的に考える。	3.10	1.12	2.89	0.99	3.10	22
29. 親切である。	3.53	0.91	3.15	0.81	6.75	5
30. 傷つきやすい。	3.49	1.09	3.68	0.98	- 2.76	95
31. 社交的である。	3.13	1.11	3.17	1.08	- 0.58	83
32. 創造的である。	3.28	1.05	3.14	0.95	2.25	32
33. 安心を求める。	4.02	0.89	4.04	0.86	- 0.21	77
34. 態度がはっきりしている。	3.09	1.05	3.29	1.10	- 2.82	96
35. こどもが好きである。	3.39	1.20	3.35	1.27	0.55	62
36. 嫉妬深い。	3.35	1.13	3.33	1.08	0.31	68
37. 仕事の手腕がある。	2.90	0.98	2.72	0.88	2.86	25
38. 機転がきく。	3.11	1.03	2.81	0.91	4.80	11
39. 新しいことにもすぐなれる。	3.25	1.11	3.61	1.10	1.20	48
40. 人の影響を受けにくい。	2.57	1.15	2.46	1.04	1.52	43
41. 気持ちを顔にあらわしやすい。	3.63	1.10	3.48	1.22	2.07	33
42. 衝動的である。	3.35	1.05	3.21	1.06	1.97	35
43. 冒険心がつよい。	3.43	1.07	3.27	1.07	2.32	31
44. きれい好きである。	3.30	1.15	3.18	0.97	1.68	38
45. 声が大きい。	3.17	1.09	3.29	1.22	- 1.50	91
46. 大胆な行動をする。	3.07	1.03	3.05	1.03	0.35	67
47. 人の先頭に立って行動する。	2.69	1.06	2.63	1.09	0.86	51
48. 多くの人に認められたい。	3.80	1.07	3.82	0.98	- 0.26	81
49. 性的な関心が強い。	3.74	0.91	2.76	0.84	17.36	1
50. ものわりがよい。	3.25	1.00	3.04	0.87	3.48	19

51. 幸せを感じる。	3.10	1.07	3.39	1.00	— 4.21	98
52. 自分に満足している。	2.70	1.11	2.65	1.04	0.79	57
53. 良心的である。	3.48	0.91	3.31	0.84	2.87	24
54. 物事に注意深い。	3.29	1.05	2.94	0.97	5.46	8
55. 決断が早い。	2.74	1.13	2.70	1.15	0.63	59
56. 愛情が豊かである。	3.33	1.01	3.29	1.03	0.64	58
57. 人に好かれる。	3.15	0.85	3.11	0.77	0.82	54
58. 利己主義である。	3.09	1.03	3.07	0.93	0.40	65
59. 人に気配りができる。	3.43	0.93	3.23	0.88	3.41	21
60. 友達づきあいが良い。	3.34	0.98	3.35	0.93	— 0.17	75
61. 物事に動じない。	2.79	1.04	2.80	1.06	— 0.09	74
62. 人の気持ちを大事にする。	3.68	0.89	3.60	0.88	1.30	46
63. 習慣やしきたりを重んじる。	2.87	1.11	2.88	1.04	— 0.21	78
64. 意欲的である。	3.15	0.95	3.17	0.89	— 0.25	79
65. 誠意がある。	3.48	0.89	3.44	0.82	0.63	60
66. 人目につくことが好きである。	2.96	1.16	2.83	1.08	1.83	37
67. プレッシャーにつよい。	2.50	1.14	2.44	1.14	0.83	52
68. 人に同情しやすい。	3.60	0.98	3.52	1.01	1.15	50
69. 客観的である。	3.25	1.05	3.17	1.00	1.19	49
70. 自分の信念を曲げない。	3.23	1.10	3.31	1.03	— 1.09	86
71. 内気である。	2.99	1.13	2.69	1.04	4.22	16
72. うぬぼれやすい。	3.28	1.03	2.97	1.00	4.57	13
73. 強引である。	2.96	1.05	2.80	0.96	2.49	27
74. 人に暖かく接する。	3.41	0.90	3.32	0.83	1.61	41
75. 信心深い。	2.62	1.17	2.42	1.05	2.77	26
76. 行動的である。	3.05	1.01	3.04	0.98	0.17	71
77. 人をほめるのが好きである。	2.99	1.08	3.05	1.05	— 0.91	84
78. すぐに泣く。	2.22	1.14	2.93	1.28	— 9.05	99
79. 自分の意見を主張する。	3.18	1.07	3.21	0.96	— 0.36	82
80. 感情的である。	3.50	1.05	3.50	1.11	— 0.04	73
81. 物事に批判的である。	3.24	1.07	2.94	1.00	4.49	15
82. ねばり強い。	2.94	1.01	3.07	1.10	— 1.99	92
83. 絵や音楽が好きである。	3.85	1.04	4.11	0.91	— 4.05	97
84. 気が変わりやすい。	3.55	1.08	3.46	1.03	1.42	45
85. 支配的である。	2.85	1.09	2.51	1.00	4.97	10
86. 従順である。	2.92	0.94	2.82	0.95	1.63	40
87. 流行に敏感である。	2.49	1.02	2.56	0.91	— 1.14	89
88. 優越感がある。	2.85	1.03	2.60	0.90	3.98	17
89. 人に献身的である。	2.99	0.95	2.88	0.89	1.87	36
90. 計画性がない。	3.12	1.28	3.06	1.11	0.80	55
91. 遠慮なくものを言う。	2.92	1.18	2.88	1.11	0.45	63
92. 言葉使いが丁寧である。	3.01	1.03	2.78	0.96	3.46	20
93. 物事をテキパキと片づける。	2.80	1.07	2.78	0.98	0.25	70
94. 世間をよく知っている。	2.71	1.02	2.38	0.93	5.18	9
95. 人の手伝いをよくする。	2.83	0.98	2.80	0.92	0.58	61
96. 先のことが予測できない。	2.92	1.13	2.89	0.98	0.45	64
97. 知的である。	3.00	1.02	2.82	0.83	3.04	23
98. 心配性である。	3.76	1.06	3.65	1.05	1.65	39
99. おだてに乗りやすい。	3.47	1.06	3.37	1.07	1.45	44
100. リーダーシップがとれる。	2.78	1.11	2.72	1.07	0.79	56

新性役割尺度の構成に関する研究

付表 1. 双極尺度による男性役割期待, 女性役割期待, 個人的評価の因子分析結果 (伊藤, 1986)

項目	評価概念 因子	男性役割期待				女性役割期待				個人的評価			
		第Ⅰ因子 共同性	第Ⅱ因子 作動性	第Ⅲ因子 美・繊細	共通性 (h ²)	第Ⅰ因子 作動性	第Ⅱ因子 共同性	第Ⅲ因子 美・繊細	共通性 (h ²)	第Ⅰ因子 共同性	第Ⅱ因子 作動性	第Ⅲ因子 美・繊細	共通性 (h ²)
・人の立場に立つ _ 自己中心的 て考えられる な		.73	.14	.25	.62	.19	.73	.07	.57	.79	.10	.15	.66
・思いやりの _ 思いやりの ある ない		.65	.20	.08	.47	.28	.51	.14	.36	.65	.31	.22	.57
・人の気持の _ 人の気持の わかる わからない		.59	.14	.17	.40	.31	.61	.15	.49	.63	.19	.24	.49
・誠 実 な _ 不 誠 実 な		.44	.25	.12	.27	.07	.67	.21	.50	.58	.20	.12	.39
・暖 か い _ 冷 た い		.64	.14	.06	.43	.13	.61	.17	.42	.62	.15	.16	.43
・よく気のつく _ 気がきかない		.29	.09	.45	.29	.07	.41	.50	.42	.50	.01	.41	.42
・献 身 的 な _ 利 己 的 な		.42	.06	.39	.33	.03	.36	.46	.34	.57	-.01	.32	.43
・行動力のある _ 行動力のない		.11	.59	-.04	.36	.83	.16	.04	.72	.06	.57	-.04	.33
・積 極 的 な _ 消 極 的 な		.13	.73	.15	.57	.69	.06	-.11	.49	.17	.61	.13	.42
・意思の強い _ 意志の弱い		.21	.40	-.07	.21	.82	.20	-.02	.71	.15	.37	-.04	.16
・大 胆 な _ 億 病 な		.08	.49	-.33	.36	.71	-.04	-.08	.51	.08	.60	.01	.37
・指導力のある _ 指導力のない		.20	.57	.08	.37	.57	.18	-.05	.36	.33	.57	.00	.43
・頼りがいの _ 頼りがいの ある ない		.29	.23	.10	.15	.57	.08	.00	.33	.27	.51	.08	.34
・決断力のある _ 決断力のない		.40	.14	-.03	.03	.60	.44	.01	.38	.18	.32	-.08	.14
・たくましい _ ひ 弱 な		.27	.33	-.24	.24	.57	-.04	-.25	.39	-.07	.55	-.22	.36
・自己主張で _ 自己主張で できる きかない		.10	.24	.06	.07	.66	.16	-.07	.47	.21	.29	.08	.13
・信念を持った _ 信念のない		.13	.26	-.01	.08	.58	.29	.03	.42	.22	.30	-.02	.14
・忍 耐 強 い _ 忍耐強くない		.32	.36	.02	.23	.47	.35	.03	.34	.35	.34	-.04	.24
・細 や か な _ が さ っ な		.07	-.08	.64	.42	-.11	.16	.81	.69	.28	-.17	.60	.47
・繊 細 な _ 荒 々 し い		.22	-.02	.48	.28	-.12	.14	.62	.07	.27	-.29	.63	.55
・言葉遣いの _ 言葉遣いの ていねいな 悪い		.10	.07	.75	.58	-.12	.10	.60	.38	.38	.11	.43	.34
・おしゃれな _ や ば な		.04	-.02	.41	.17	.12	.02	.29	.10	.12	.19	.68	.51
・色気のある _ 色気のない		-.02	.02	.19	.04	-.13	.05	.19	.06	.06	.13	.65	.44
・か わ い い _ か わ い く ない		.14	.04	.02	.02	-.21	.25	.25	.17	.17	-.07	.65	.46
分散 (%)		2.67 (11.13)	2.23 (9.29)	2.09 (8.71)	6.99 (29.13)	5.02 (20.92)	2.77 (11.54)	2.26 (11.08)	10.05 (41.88)	3.58 (14.92)	2.86 (11.92)	2.78 (11.58)	9.22 (38.42)

付表 2. 新性役割尺度

男性性項目	女性性項目
1. 親切である	1. 行動的である
2. 強引である	2. 協調性がある
3. 物事を論理的に考える	3. 感情的である
4. 思いやりがある	4. 積極的である
5. 支配的である	5. 女らしい
6. 知的である	6. 傷つきやすい
7. やさしい	7. 自分の意見を主張する
8. 独立心がつよい	8. 人に信用されやすい
9. 仕事の手腕がある	9. 嫉妬深い
10. 良心的である	10. 意欲的である
11. 冒険心がつよい	11. 心の傷ついた人をなぐさめる
12. 機転がきく	12. 安心をもとめる
13. 人に気配りができる	13. 陽気である
14. 短気である	14. 幸せを感じる
15. 数学や科学が好きである	15. すぐに泣く
16. やさしい声で話す	16. 態度がはっきりしている
17. 男らしい	17. 人をほめるのが好きである
18. 創造的である	18. 空想的である